銷夏の水面

月森うさこ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
銷夏の水面

【Ｎコード】
Ｎ５０１６Ｈ

【作者名】
月森うさこ

【あらすじ】
「翼、あるモノ」の番外編です。本編より七年くらい前の話。主人公と彼の師が登場するありがちな設定もの。女装好き？男の娘好き？は楽しいかも。

『翼、あるモノ。』番外編の番外編。

「――――暑い。」

じりじりと照り付ける太陽。
駆け足で過ぎるくらい、この国の夏は短い。
珍しい酷暑は、慣れぬ人間にとっては随分堪える。

「文句は言ったらキリないけど…人使い荒過ぎっ、こんなの修行に全然関係ないじゃないかっ」

愚痴くらい零れると言うもの。

「ノド…乾いたー」

帽子のつばを持ち上げて、汗ばむ長い髪と額を指ではらった。
俯くと、石畳の隙間をアリたちが並んで食べ物を運ぶのが見える。

「一緒だ。僕と」

アリの心情など知らないが同情して吐息を一つ、また歩き出す。
真っ白なドレスの裾は纏わり付くし、エナメルの靴が痛い。
総レースのワンピースは汗を吸わないので、その中はぐっしょりで気持ち悪い。

「この服の趣味も…どーかと思いますよっ」

やっとお目当ての店に到着。ノブを手に、力任せに引いた。

「いらっしゃい――ああ、暑かったろ。ご苦労様だね」

（お…女、女の子女の子、僕は女の子……）

店主の笑顔に、まるで確認する様に言い聞かせる。

「すみません、いつものを十本お願いします」

「凄い汗だね、水でも飲むかい」

そう言うと、店主はコップを手に樽の口を捻る。
水がコップに溜まる音が、ゴクリとノドを鳴らせた。

「どーぞ」

「ありがとう、いただきます」

その笑顔は店主にとってはダイナマイト級だった。
浮かれた足取りで商品を取りに行く店主を、ちょっとキモイと思いつつ水を飲み干す。

「ウマ…っじゃなくてオイシーですぅ」

ちらっと隣に立つ客を見る、ばちっと目が合った。

（さっきから、ずっとこっち見てるよね？この人）

こんな時は、とりあえず笑っておけ。何故か分からないが、大抵これで上手くいった。

……が、

「え」

客、どー見たっていいおじさんのその人が、ボロボロと涙を零した。

（なになにっ！？ナンで泣いてるのーっ？この人）

今度は額から、暑さのせいでない変な汗が出た。

「あ、あの…？」

「ジェイクっ…そうか…そうだよな、あのお嬢さんと同じくらいの年端だもんな」

酒瓶を抱えて戻った店主は、ジェイクと呼んだおじさんにしんみりと語る。

「どうか、したんですか？」

訊かずにいられないだろう、この状況。

「ああ、いや……いや？…そうだっ、お嬢さんの先生っ凄腕の戦術士だったよなっ？」

「え、ええ…まぁ」

まぁ、間違いではないな。呑んだくれだけど。

「ジェイク、頼んでみてはどうだ？もしかすると沼主を倒してくれ

るかも知れん」
「あの？」
「お嬢さんっ！！」
「はいっ？」
「会わせてくれないかっ？お嬢さんの先生様にっ」
いきなり両手を掴み取り、おじさんが懇願する。
「どーか頼みますっ、娘を助けたいんです、沼主様から」
「ぬま、ぬし…？」

「なるほど――――つまり、沼に棲む化け物が供物を要求し断ると村を襲う…と」
その供物と言うのが、酒と食べ物……そして美しい女性。
なんか、よく聞く話だが、実際にあるとは思わなかった。
「確かに師匠なら…」
師なら朝飯前だろう。
でもなぁ。

「とにかく、話はしてみますが、最悪の場合僕…私が沼主を」
「駄目なんだっ、とにかくとか悠長なこと言ってられないんだよお嬢さんっ」
「……え、それって」
「今晩なんですっ、急いでるんですっ」
えぇぇーーっっ。
「そ、そうですか。分かりました、これからすぐ戻って師匠に…」
「ありがとうっっお嬢さんっ！！金はありませんが、村にはこの店にも卸している酒と、食べ物だったら幾らでも差し上げますんで、くれぐれも先生様に宜しくお伝え下さいっ」
またまた両手を掴んでねんごろにお願いされる。

「――――いいだろう。その話引き受けようじゃないか」
ナンなんだ。このタイミング。とゆーか、何時から？
いやいや。――――師は、酒とか美しい女のキーワードにだけは弱かった。
「……師匠」
「ししょーっじゃねぇっ！！馬鹿弟子っ、遅っせぇーんだよっ使いも満足に出来ないのかっボケッ」

ゲシゲシと足蹴にされた後、店の床に正座させられる。

「先生っ、なにもこんな所に座らせなくても」

いじらしく正座し反省してるっぽい姿に、店主は自分が話を持ち掛けたばかりにと、胸を痛める。

「このお嬢さんは悪くないんです、今すぐ話を聞いてくれとこちらが頼んだので」

おじさんも釈明するが、何言ったって無駄だし。

（白を黒と言い切るのが、この師匠なんですよぉ）

そんな師に誤解や非難を解き、理解を求めることは至難を越えてほぼ不可能。

「おおっ、そうですか。これは弟子に悪い事をしました」

（へ？）

「ちゃんと話を訊いてやれば良かった」

（はいっ？）

「まぁ、そんな訳だし、沼主とやらは必ず退治しますよ」

（どんなワケ！？）

「ほっ本当ですかっ！！ありがとうございますっ」
溜まるんじゃないか？ってくらいの涙を流して、おじさんは感謝しきりに頭を下げる。
「立て。弟子よ」
「師匠、あの…」
「ところで、先程の礼の話だが」
こっちは全くの無視で、師はお礼のことを持ちかける。
「はいっ、それはもうっ、酒と肉、魚や野菜なら幾らでもっ」
「二言はないな？」
こくこくと頷く。
「いいだろう。では酒を頂こうか、ここの地酒は最高に旨い」
と、言う事は…もしかすると、当分はこの格好と、ここに酒を買いに行かないで済むってことなのかと考える。
（それはちょっと嬉しいかも）
「それで先生。退治ってどうやるんですか？やっぱり、それでバッサリ？」
脇に差す刀剣を指して、店主が言った。

「いや――沼主とやらは女も所望しているとか。それも美人ばかり」

「ええ、まぁ」

「お二人、ウチの弟子もこれで中々の見栄えだろう？」

「中々どころか…」

特に店主は激しく相槌を打つ。

「師匠？あの、この人たちには僕が男――いたっ」

おもいっきし、足を踏まれる。

「今日連れて行かれるはずのその娘と、トレードしようじゃないかっ――なぁ？ラヴィアちゃん」

「ラヴィ…ア、ちゃん……？」

「こー見えて弟子は腕のいい精霊使い。やってくれるでしょう」

「いや、しかしっ…いくらなんでも危険では」

「もちろん同行するが、いい修行になる。よぉーしっ！そうと決まったら早速そちらの村へ参ろうかっ、なっラヴィアよ」

「え、あのっ…師匠っ」

それってつまり、退治するのって僕ってことですかーっ？？？

「だって、僕…私は――――師匠っ無茶ですっバレますって」

「バレるかっ。ぐだぐだ言ってないで、今日買った分の酒を受け取って、とっとと付いて来いっ馬鹿弟子」

「…オニだ」

こんな格好で今日一日過ごすことになるなんて。
大きな布を出して、おざなりに酒瓶を乗せ、巻く様にしてそれを肩に担ぐ。

「割るなよっ、ラヴィアちゃん」

十本で約十五キロ。キュートなその身なりには不似合いなコレを背負って後を追う。

（僕は男だっ…師匠の、師匠なんかーっっ！！……うぅぅっ）

しかし。
どー見たって悲しいくらいの細身と白い肌。長く伸びた髪も、全部まるごと女の子にしか見えない彼――――ラヴィ・クラフトのストレスは溜まる一方だった。

ｎｅｘｔ

『翼、あるモノ。』番外編の番外編。

（こんなの、絶対修行と違うしーっ……重い。）

かれこれ一時間あまりは歩いただろうか。
酒瓶が背中で時折ガチャガチャと音をたてる度に冷や汗をかき、何でもない時も暑さで汗が流れる。

「おい」

「なぁんですかぁ…？」

「近付くなと言っただろ。五メートルは離れて歩け、そんな変なもん背負ってる奴と知り合いだって思われちゃかなわんっ」

（師匠のでしょーっっ！！）

「先生様、やっぱり可哀想ですよ。女の子にあんな重い物、私が代わりましょう」

「ジェイク殿、その様な情けはかえって修行の妨げと言うもの」

「しかしですねぇ、あんな細っこい身体で……」

ジェイクの言葉に、師匠のクレイドがニヤリと笑ってラヴィに視線を移す。

「…まぁ。確かに見た目はこの通り、ガリガリのひょろひょろのナヨナヨ……」

「ジェイクさんっ！！ぼ…私っ全然平気ですのよっ、おほほほほっ」
眉尻を引きつらせて、笑顔には程遠い表情だが本人は笑っているつもりらしかった。
「ラヴィアもああ言っていることです、さっ村へ急ぎましょう」
しっしっ、と歩き出したクレイドに掃われて、数メートルの間隔を空けてラヴィが後を追う。
（――師匠。呪っていいですか？）
そんなこんなで、三十分くらい歩き続けて、ようやくジェイクの村に到着した。

「――と、言う訳でこの偉大な大先生様が、沼主様を退治して下さることになった」
おおっ！！と、集まった村人達が口々に感嘆の声を上げ、若い娘達は喜びから泣き出した。
「とにかくこの暑い中来て下さったんだ、持て成しの用意を」
村長の言葉に、女達はバタバタと慌てて準備に取り掛かる。

結局随分と遅れて着いたラヴィは、クレイドを取り囲む人達に阻まれてしまい、村長の家屋の戸外に腰を下ろし、ようやく背中の荷物から解放された。

「……それで、沼主に貢ぐ美しい娘というのは？」

「私の娘です、ほら先程から先生様の隣に」

「となり…娘」

「エミリーです。ありがとうございますっ先生様っ」

「……ウツクシイ」

「良かったなぁっエミリー、父さんお前の事を想うと…うぅっ」

「ムスメ…？」

「やだっ、お父さんたらっ泣いちゃって。先生様の前なのに」

見なかった、聞かなかったことにしよう。とクレイドは思った。

「ところで、早速ですがどの様な方法で沼主様を？」

白い髭がヤギを彷彿とさせる村長がクレイドに話し掛ける。

「ああ、それはですね――――」

長身の身体を屈めて戸口を出ると、側の井戸で水を汲んでいるラヴィにクレイドが近付き、村長を先頭に村人達もわらわらと移動する。

「アイツが代わりの貢ぎ物になり、隠れて共に同行し沼主を倒します」

「なんと…まだまだ子供。幼過ぎではありませんか？クレイド殿」

長く伸びた顎鬚を何度も撫でながら、村長はじぃーっとラヴィを見詰める。

「…え？」

井戸水をバケツごとで呷る様にして水を飲んでいたら、いつの間にか人だかりが全員でラヴィを見ていた。

「こ、こんにちは。その…咽喉が乾いたもので、すみません水貰っちゃいました」

「こんな子供に、もしものことがあったら……」

「いやいや村長殿。コレぱっと見は子供ですが、超長生きな種族の人間でして実はゴニョゴニョ…なんです」

「ひゃーぁっ、驚きましたなっ」

「しかも頑丈っ、怪我してもスパッと治す。まさに一石三鳥っ」

「ほ、欲しいですな…あ、いやいや」

「師匠っ、変な紹介しないで下さいよっ」

村長も村長のくせに乗せられてんじゃねぇ。……段々と思考も黒くなっていくラヴィだった。

「それにしても可愛い子だよな」

「めっちゃカワイイ」

若い男らは、長生きとか頑丈とかどーでもいいのか、ラヴィを照れて見た。

（キ、キモイっ…僕男なんだってっ！！）

「そーだよな。お前たちはコイツ見てカワイイって思うよな？」

男達は揃って頷く。

「だよな。ジェイク殿の目だけが変なのか」

「？何か仰いましたか、先生様」

「いや。まぁ、そんなワケだから少々のことはどーにかなるってもんでしょう、なっラヴィアよ」

「う、ふふふ。……ですね、師匠」（絶対呪ってやるーっ）

「はぁっっ。何だろう、この疲労感」

畑のあぜ道に座り込む。
日が暮れてカラスが鳴く頃、前祝と称して飲みだす師につられて、何故か宴会っぽくなってきた村長宅と、そこに居た男たちの好意の目から、逃げる様にラヴィは抜け出して来た。

「髪、邪魔だ」

昼間の暑さが嘘の様に、涼しい風が髪をさらう。
襟元のリボンを抜き取って、一つに結い上げるが、上手く髪が纏まらない。
つい、イライラして頭をワシワシと掻く。

「……やってやろうか？」

一際、冷んやりとした風が後ろから吹き、子供の声がした。

「あ――いいの？」

「うん。俺上手だよ」

リボンを手渡すと、男の子がラヴィの髪をすくう。

「お前がエミリーの代わりに行くのか？」

「うん」

「男なのに？」

「うん――うん？…えっ！？なんで男って……」

正直、バレたのはこれが初めてだったので、驚いて男の子に振り向く。

「じっとして」

夕日に髪と肌が橙に染まる。一瞬だったし、眩しくて顔がよく見えなかったが、七、八才の子供だと思う。

「……できたよ」

「ありがと。君――」

「ニオイでわかった」

「に、臭い？うそっ」

慌てて自分を嗅いでみたりする。

「何でっ！？汗とかっ？」

「ウソだよ。ホントは透けて見えるんだ」

「……え。ええーっっ！！」

なんだかよく分からないが、両手をあたふたさせて身を屈め、男の子を見るとケラケラと笑われた。

「騙しやすいな、お前。すっごい単純」

「う゛。」

「隣に座っていい？」

ラヴィは頷いて座り直すと、男の子が横に並ぶ。

「俺さ、ハーフなんだよね。人間と精霊の…男ってわかったのは精霊が教えてくれたから」

「そっか、それでかぁ」

「お前のこと知ってるってみんな騒ぎまくんの。それがウルサくてさ、だからさっきのはお返し」

「それって、とばっちり…」

仕様がない無いので空笑いして、はぁ…と溜息を付く。

「――なぁ」

「んー？」

また、先程の冷んやりとした風が頬にあたる。

「殺すのか？沼主」

男の子の目を見ると、何故だか返答に戸惑う。夕日に、金に染まる瞳が何かを訴えている様で、ラヴィは視線を逸らせなかった。

「分からないけど、戻って来ないこれまでの女の子たちがもし――

―」

「死んでたら殺すのか？」

「…うん」

「そうか」

「あの、君はその…」

「どー見たって弱っちぃ身体してんのにな、お前」

立ち上がり、お尻をパンパンとはらうと、ラヴィの背中をバシっと叩いた。

「頑張れよ、ラヴィ…あ、今はラヴィアか」

「あ、ねぇっ…ちょっと」

「アベルだ。じゃーな」

ｎｅｘｔ

『翼、あるモノ。』番外編の番外編。

村の裏手から出て、少し歩くと湿地が広がる。
木々が茂る沼地と、水深はさほどないらしいが、船を出せる程度ではあるらしい。
想像よりもずっと大きな沼だった。
沼の中心に位置する、盛り上がったその場所へは小船で渡る。

「ジェイクさん、あそこに見えるのって、土なんですか？」

沈水植物が茂る緩やかな流れに乗って、供物とラヴィ、クレイドを載せた小船を、ジェイクが中央部にある盛り上がりに向けて漕ぎ進む。

「前は水草が生育してましたが、沼主様があそこを土地に変えてしまったんです」

「じゃ、棲んでるのかな。そこに」

「恐らく…見たものはいませんが」

灯したランプと月の明かりを頼りに、ゆっくりと運ぶ小船がグラグラと揺れ、積荷からクレイドが顔を出した。

「師匠、もうすぐ着きますから隠れてて下さいよっ」

「あん？」

「酔ってんですかっ！？もうっ隠れてよぉっ」

「あの程度で酔うか。……お前さぁ」

クレイドの真面目な表情に、ラヴィも少々改まって見返した。

「もっと、色気出せないのか？」

「……」

「折角着飾ってもらっといて、足りないんだよな艶かしさが。そうそう、お前の支配してるサラだっけ？アイツみたいに高飛車でえっちぃ感じ、やってみ？」

「出来る訳ないじゃないですか。いやだなぁ師匠。やっぱり酔ってんじゃないですか、阿呆なことばかり言って、ああ…それとも本当に愚かなんでしょうか。まいっちゃうなぁ、もう」

し～ん。……約五秒の沈黙が流れた。

「サラって誰かに似てたよなぁ？誰だっけか？えーっと、ああっそうだお前の――――ん？んんん…っっっ！？」

「あ、すみませんねぇ。つい力が暴走しちゃいました」

「んぁっ…ア、アホかっ！！窒息死させる気かっ」

「そんなことよりっ、師匠らしいアドバイスとかないんですかっ！？どーせ僕が相手するんでしょっ、師匠って…師匠は…っ」

何時だって、本当に欲しい言葉はくれない。

双眸を細め、視界からクレイドを消す。暗い水面はまるで、心を映す鏡のよう。

「どれだけ甘えていたいんだ、お前は」

「甘えてなんか…っ、訊きたいことがあったのにっ、でももういいです」

「ボケが」

ガツンと一発、げんこつが飛んできた。

「だったらそんな言い方はやめろ。素直になれん自分を他人の所為にするな」

「僕は…っ」

「私と言えっ、聞いてやる…話せ」

その言葉に、ラヴィは面を上げることが出来なかった。

「いい度胸だ。しかし無視を決め込むには百万年早いんだよっクソガキ」

「――――師…っ」

クレイドの動きに船体が大きく揺れて、二人を心配そうに見ていたジェイクが崩れそうになった積荷を支える。

「お前のオセンチに付き合ってやる気はない。さっさと話せ馬鹿弟

子」

浅紫の瞳は、この闇にあっても強い意志を光に変えて放つ。
あっさり押し倒されて、狭い船内でぶつけた頭がジンジンする。
息を呑んで、もう逸らすことの出来ない両目をラヴィは見入る。

「早く言わんと襲うぞっ」

「も、もしっ、人化した精霊が人間に裏切られたら……失った契約の代償は…精霊は、どうなっちゃうんですか？」

「――――なるほど。確かに俺しか答えられんな」

「し、しょ…」

「お前さぁ、勝手に変なジレンマに陥ってグジグジ悩んでんじゃねぇよ。俺が傷付くとでも？馬鹿かお前は」

「ごめん、なさい」

「謝んなっキモイっ……契約を途中破棄された精霊は大概消滅する。存在意義を失うからな」

身体を起すと、クレイドは頭を掻きながら大きく息を吐いた。

「通常の支配契約と一緒だ。ただ人化した分、私情が挟まって厄介なこともある……何処で気付いた？」

「確信では…さっき、混血の男の子に会って、それで服を着替えた時に村の人から少し話しを」

ラヴィはそう言うが、ほぼ間違いでは無いだろう。馬鹿扱いこそしているが利口で頭の回転だっていい事をクレイドは承知していた。

「とにかくっ、お前は喰われそうなにったら迷わず殺れ。情けに溺れたら、今度は俺がお前を持て余す。分かったなっ？」

「……はい」

next

『翼、あるモノ。』番外編の番外編。

「アベル？ええ、この村の子よ」

「アベルと話したの？あの子、良い子なんだけど普段は殆ど喋らないから…だったらそうね、ラヴィアさんのこと気に入っちゃたのかしら」

「村長さんの一番下の娘さん夫婦が引き取って育ててるのよ……ラヴィアさん、ちょっときつく締めるわよっ」

「ぐぇっ…あ、それでアベルの本当のご両親は…その」

「いないわ。父親の方がこの村の出身だったんだけど、女癖が悪くて――よしっ。見てーぇっ、この腰のくびれ具合っ」

「凄い…折れるんじゃない？」

「もぅっ、羨ましいったら……胸は全然ないケドね。」

「そーなんですよぉー、ははは。……で、母親は？アベルは自分が精霊との混血だって言ってましたが」

「私たちも詳しくは知らないんだけど、亡くなったそうよ。この村にはあの子一人で来たし、でも混血って言うのは本当だと思うわ。不思議な子だもの」

「悪い意味じゃなくてね。父親に似なくて良かったわよ、女房と子供捨てて出て行く様な人だもの」

「そう…ですか」

「じゃ、次はお化粧ね。ここへ座って」

「うん…えっ？化粧っ？いっいいですっ、遠慮しときますっ」

「なに？それって、化粧しなくても充分勝負出来るってことかしらん？」

「勝負…いえっ、そんなつもりでは無くてっ」

「確かにっ、おしろいの必要もないくらいすべすべの白い肌だし？目だって色がいらないくらい大きなエメラルドみたいだけど、子供っぽ過ぎるのよ。お姉さんが大人にしてあげるわっ」

（ひぇーっ、イヤだよーっっ）

「こらっ！逃げちゃダメっ。先生様からも『作戦の為には必要不可欠だ。完璧にやってくれ』って頼まれてるんだからっ」

（し、師匠の阿呆っっ――！！）

「あぁ？今ナンか言ったか」

「い、言ってませんよ。荷物は喋らないで下さいっ」

「けっ。エラそーに」

「先生様、ラヴィアさん、私は本当に残らなくて…娘の代わりになってもらっただけでも有り難いのに」

積荷を降ろし終えたジェイクが、申し訳なさそうに言った。

「ジェイクさん気にしないで下さい。ここへ連れてきて貰っただけで充分です」

「しかし…」

「荷を降ろしたら船を出す決まりなんでしょ？本当に大丈夫ですから行って下さい」

「と言うか、居たらかえって邪魔。約束通り、一時間したら迎えに来ればいいんだジェイク殿」

「……分かりました。では一時間後に必ず……ラヴィアさん」

「はい」

「ありがとうございます。どうかご無事で」

深く頭を下げて、ジェイクは船に乗り込むと、ゆっくりと漕ぎ出す。

「ナンで俺には礼を言わないんだ、あのオッサン」

多分、そういうところが理由なんじゃ…と、含み笑いに緩んだ口許をラヴィは結び直し、荷に隠れるクレイドが見えていないか確認す

る。

「今笑っただろ、馬鹿弟子」

「しぃーっ、流石に黙って下さいよっ」

「ちっ」

なんだかなぁ。妙な子供っぽさのある師匠に溜息を漏らすと、後方から不意に頬を掠める冷たい風に、身の毛がよだつ感覚がした。

そこに、居るのが分かる。

強い不快感と禍々しさを除けば、この感じをラヴィは知っていた。

《……ナニをしている？》

「荷を、整理してました」

少しずつ身体の向きを変え、ラヴィは真後ろの声の主を――真偽のほどを確かめる。

《泣いていないのだな、お前は》

「え…」

《ここへ来た娘は、皆泣きじゃくるが…お前は、そうか……》

顔を顰めて見るラヴィに、それは無表情で語りかける。

人のかたちをした霊体。精霊であったのが定かでないくらいに、そ

れは魑魅に近い容貌に変していた。
《やっと、私を殺しにきたのか？それとも――あの人を返しにか？》
「あの人、とは」
《私の夫…ずっと、待っているのに帰らない》
沈着な声色はそのまま、少し物憂いに表情を変えた。
《側に居てくれるだけでいいのに、何故戻らない》
「ここで、ただ待って……それだけじゃないでしょ、人身供犠は何の為ですか？彼女たちは何処に」
《殺すのか、私を》
「僕の話を聞いて下さい、でなきゃ…」
《消失を望むか？》
「お願いっ話を聞いて…っ」
自分でも理解出来ない何かが気持ちを逸らせる。冷静さを欠いてはならない、ラヴィは唇を噛んだ。
《お前さん》
呼び掛けに応じる一瞬、一拍にも満たないその間に、あっさりと懐

を取られた。
《殺して…もう終わりにしてくれないか？自ら存在を絶つのは、あの人との約定を違えることになる》
「ちがう…そうじゃない、貴方は……」

それが、
貴方の望みなの？

「――嘘だよ…だったら、どうして泣いてるの？」
《泣く…？》
「泣いてるよ、涙を…持ち合わせていないだけ」
《悲しい、のか？埋めてくれるのか…？おかしな衣を纏わず、男として愛してくれるのか――お前は…っ》
僅かの躊躇が、触れることを許してしまう。ぞんざいに毟り取るドレスに、現われた肌から血が滲んだ。

next

『翼、あるモノ。』番外編の番外編。

欲しいのは獲得した愛情。
ぬくもり。

確証のない未来に捧げた贖罪は小さなものではない。

愛されることが全てのはずだから、
残したものの大きさを、
誰よりも知っている。

だから、

「――――はい」

与えられる愛は、一つではないことに
貴方は気付いているだろうか？

「僕が貴方を、――――」
「ラヴィっ！」

その孤独は、独りよがりの罪。
側に感じられない淋しさを、誰よりも知っている貴方なのに。

「阿呆かっ！お前何やって、さっさと…」
荷を被う布を、後ろ手に強く押え付け、ラヴィは師の言葉を遮った。
「――――お前、どういうつもりだ？」
「師匠、お願いです」
「駄目だ」
「まだ言ってません、何も」
「許されない。背くな」
目は彼女を捉えたまま、布をぎゅっと握り締める。
「――いやだ」
「解っているよな、コイツはもう精霊ではない。消滅以外は無い」
《もう一人、いたのか…やはり約束を違えるのか》
「ま…っ」
巻き起こる風息が辺りを包み、低圧した空気が真空を生む。
「鎌鼬っ、防御しろラヴ――お…おい…っ！！」
防ぐ所か、飛び出したクレイドをラヴィが阻止する。
術に妨げられた身体は荷の山に叩き付けられた。

「何しやがるっ、とち狂ってんじゃねぇ…っ」

真空の刃に傷付けられながら、ラヴィはじわり、彼女の腕を掴み取った。

「僕が貴方を愛しますっ！！人では無く、精霊としての貴方を……だからお願いっ、もう悲しまないでよっ」

《今更世迷言を…！！》

「アベルを愛してあげてっ、ずっと待ってるよ…淋しいって、母親に戻れなくても貴方はアベルを愛せるんだっ」

何故、こんなにも懇願するのか。

渇望の理由――重ね合わせる心は合わせ鏡の自分。

「馬鹿かっ、無茶苦茶を言うなっ…人化して落ちた精霊を戻すだと？そんなことは……」

「誰に出来なくても、僕には…僕なら出来る」

「ラヴィ…っ！！無理だ」

「――僕は術を宿す者」

血の伝う頬を肩で拭い、深い緑色の瞳がクレイドに面した。

「師匠、僕はグリモワールなんだ」
言葉を失わせる一言は、世界で只一人にしか口に出来ない言葉。
「……ばか、がっ」
「ごめんなさい、師匠」
伏せた瞼を、もう一度彼女に向き直り、開いた。
《……ア、ベル…私の息子……》
「そうですっ、アベルは村に居ますっ…彼に、貴方と同じ思いをさせるのっ！？」
《アベル…あの子は、私にはもうあの子を……》
「出来るよ、ちゃんと抱き締めてあげられる――僕を信じてっ」
《信、じる？》
消え入りそうな声に、ラヴィは強く頷き返す。
「信じて。僕は――僕は貴方を裏切らない」
《簡単に…信じろだと？それがどれ程の苦しみか、裏切らないなど…人の心とは変わるものなのに》
「証を立てましょう。僕が貴方を必要とする理由と、その願いを込めて」

それは――――。

「支配……僕が、貴方の主になる」

「お前の括る精霊…に？本当に出来るのか、そんなことが……」

そっと、差し出す手と、微笑を湛えてラヴィは告げる。

「僕を感じて？…この力は貴方を愛し、必要とするものの為にあるから」

《その、チカラの名は……》

「ラヴィ・クラフト。そして、貴方が愛する者の為に――――委ねて、僕に全てを」

《……ラヴィ……》

繋がる手と手。ふわりと包み込む風は、輝きを放つ無数の粒子を運び、それらは顕現する。

軽やかに舞うシルフたちが、斉しく一つの想いにラヴィの周りにたゆたう。

《祝福を、くれるのか…？もう一度私に……こんな私に》

「――――始めるよ。……汝らを統べる、我が声に嘱するモノよ。我はこのモノを握り、従属させる者……聴け、この名を支配の錠とする――――名を、アーシェラルド・ラヴィ・クラフィストファルース」

誓約の口上と同時に、ラヴィは強く願う。
ただ、彼女をもう一度風を司るエレメンタルの一つに返す為に。

《ラヴィ…これは巻き戻しなの…か》

「いいえ」

その容は徐徐に失われ、新たに形成されて行く。

「これはもう一度、ここから始まる新しい貴方です。過去は消えない、でも…だからこそ、形は変わっても貴方はアベルを忘れない」

《そうか――――ありがとう、ラヴィ・クラフト》

涙が、零れた。泣きたい時に流せる涙の温さを、彼女は思い出す。
そして。

《……私は屈服に値するモノ――――聞き届けます、我が主》

ここより、履行される新たなる相関。

「――――貴方に与える名はジル。ジル・フェンルーガ。何よりもジルフェらしい貴方の、新しい名前です」

next

『翼、あるモノ。』番外編の番外編。

「やりやがった…か」

深い溜息を一つ、それは安堵とは違う己の甘さに対する後悔からだった。

ラヴィを見る目には依然厳しさを含んだままで、クレイドは立ち上がる。

「師…」

傷だらけの彼の前に立ち、クレイドはそのまま視線だけを、風の精霊――ジル・フェンルーガに移す。

「娘どもはどうした。ここに連れてこられた四人だ」

《……無事です、皆。ここから向こう岸に渡った洞窟の中に居ます》

ジルの言葉に、ラヴィは胸を撫で下ろす。

「何故娘を所望した」

《あの人が…望んでいたので、こうすれば帰ってきてくれるかと》

愚かだったと付け足して、ジルは俯く。

「それで酒と食い物か、つまらん。――――お前らはここに居ろ、連れて来る」

「師匠、僕も一緒に…」

「お前はここで座ってろ」

「なんで…っ、僕も」

「血だらけの汚いガキを連れて歩く趣味はねぇ」

「でも…っ」

乱暴にラヴィの腕を掴み取り、睨めつける師を彼も見返す。
怒りに触れたことは解っている。けれども、間違った事をしたとはラヴィは思わなかった。

「自分だけ傷付けば…耐えられたらそれでいいのか？俺はお前のそういうところが大嫌いなんだっ」

「命令を無視したことは謝りますっ、だけど他に方法なんて」

「――――お前は何も解ってない。それらは結果に過ぎん、何故もっと大事にしない？自分を」

「だいじ…？師匠、なに…言って……僕、ぼく…は――――」

《主っ！？》

「危ういんだよ、お前は」

崩れる身体をクレイドが受け止める。不意に足の力が抜け、視界が、焦点が定まらない。

意識が薄れていくのを感じた。

《主っ…ラヴィっ》

「お前がまだ存在してるってことは、完全には失ってないってことだ――シルフ、今のうちに言っておく、こいつを護れ……全霊をかけてな」

《もとより、そのつもりです》

「精霊であれば、翼有を知っているな？」

クレイドの問いにジルは頷き、抱えられたラヴィの髪にそっと触れる。

「確かに、この外見に比例しない時間を生きて、そこいらのじぃさんよりは知識もある。でもそれはあくまで人の物差し、こいつの肉体は見たままの子供…その歪みを教えてやれる奴がおらん」

《主の両親は…》

「いない。正確には存在するが、逢う事を禁じられている。いないも同然だ」

《そんな…この方は》

「今お前が言った様に、こいつは『この方』として生きてきた。尊い存在は俺に言わせれば飼い殺し、そのくせ圧巻するこの魔力を使いこなせるものだと、周りも自身も疑わない。でもそれはもっと先の話だ」

足許にラヴィを寝かせ、クレイドは何度目かの溜息を漏らす。
「……バカが、デタラメなんだよお前は。ぶっ倒れるだけで済んだ自分の運に感謝するんだな」

広げた両手。
空っぽの心は、
満たす器を失くして、ぽろぽろと零れる。
愛を与えられた事のないボクが、

――そんなオマエがアイをカタるのは、オカシイヨ――

「！？……あ、れ…？」
差し込む陽光はオレンジ色。
状況が掴めず、キョロキョロと辺りを窺う。
「夢…じゃ、ないよね」
何とも言えない倦怠感。
手当てされた腕を持ち上げて、ラヴィはぼんやりとした頭で状況を

整理する。

「イテテ…すご、ぐるぐる巻き」

身体中の包帯に苦笑して、ベッドから起き上がろうとシーツをめくった。

ゲコ。

「げこ？……え――――うわぁっ！」

びょ～んっと、それが跳ねた。

「な、なんで…なんでこんなにデッカイのが…ダメだよ、跳んじゃダメっ！じっと――――」

傷が痛いとか言ってる場合じゃない。とにかくここを出ようと、転がる様にベッドから抜け出すが、中々の飛距離でそれがラヴィ目掛けて飛び付いて来た。

「ひっ…ひぇっっっ」

脳裏にクレイドの、ニヤ付いた顔が浮かぶ。

これは絶対師匠の仕業だと、ラヴィがそう確信した時ドアがばんっと開いた。

「よぉ。やっと起きたか馬鹿弟子」

その表情は、ラヴィが想像したのと全く同じだった。

「師匠っ、子供みたいな嫌がらせはやめて下さいっ…何でここにカエルが、それもこんなに大っきいんですかっ！？」

ラヴィの頭の上に乗っかったカエルが、ゲコゲコ鳴いた。

「沼主だ」

「は？」

「死闘の末、邪悪なところだけやっつけた沼主の、もとの姿……って設定だ。それらしくちょっと拡大してみた」

「沼主…カエル、が」

「しょーがねぇだろっ、お前が精霊に戻しちまったんだ。それらしい事言って納得させなきゃならん――――あ、因みにお前は全く役に立たなくて、ケガだけした馬鹿ってことになってるからヨロシク」

「……」

「なんだ、不服か？」

俯くと、カエルがまたびょ～んと跳ねて、クレイドの足許で止まった。

「師匠」

「焼いて食うか」

「師匠――――すみませんでした」

そのまま深く頭を下げて、ラヴィは唇を噛んだ。

「謝るな、鳥肌が立つわっ」

首を横に振って、ラヴィがもう一度謝罪すると、クレイドはドアに肘を付き、くしゃくしゃと髪を掻いた。

「――もういい。目が覚めたんなら、とっとと傷治して行ってこい。……逢わせてやるんだろ」

next

『翼、あるモノ。』番外編の番外編。

泥濘に足をとられながら、沼の瀬を目指す。
ひんやりとした土の感触、葦を掻き分けて沈んでいく夕日に目を細め、ラヴィは風の音に耳を澄ました。

「大丈夫…だよ、ね」

姿は違っても、きっと何も変わらない。
信じたい――――絆とは、そういうものだと。

覗き込む水面。
しゃがんで、濁っていないそこに映る顔に表情をあげてみる。

「はは…ヒドイ顔」

傷は精霊の加護により、跡形もなく癒えたけれど。
白い肌がぼんやりと水の表面に浮かぶ。

どうしようもない淋しさは、埋めることの出来ない孤独。
辛いとか、苦しいとか、安らぎが…欲しいとか。
声に出して言えない。
呑み込んで、消化されないまま遣り過ごす。

「ここでいいよね。早く行きな、師匠に食べられちゃうよ」

濡れ衣をかけられたカエルを逃がして、ラヴィは腰を上げる。

「――ここに、居たんだ」
渡る風が、頬を掠め髪をもてあそぶ。
「ケガしたって聞いたけど…なんだ、元気じゃん？」
「アベル…どうして」
今頃君は母親と――不安が、胸を揺さぶる。
駆け寄るアベルを、ラヴィは立ち竦んだまま目で追うだけで、言葉も続かない。
「ラヴィ」
手を伸ばせば届く所に、彼は立ってラヴィを見据えた。
どうしていいのか分からない。笑えばいい？それとも、優しく――
――
「ありがとう…っ、ラヴィありがとうっ」
懐に飛び込むアベルは、力一杯ラヴィにしがみ付いた。
「俺すぐに分かったよっ、母さんだって――母さんに逢えたっ、ありがとうラヴィっ」
愛されることを知らない僕でも、
信じていいですか？

絆とは、あらゆる障壁を越えられるものだと――――。

「ラヴィ…？」

奥歯を噛み締めるが、込み上げる熱いものを止めることは出来なかった。

まばたきを忘れて、何処を見るともない瞳から涙が頬を伝う。

「なんで…ラヴィが泣いて……あっ、どこか痛くした？」

「そうじゃ…な、い」

心配げに袖を引っ張るアベルを、包む様に抱き締める。

「分かん、ない…けど、だけど……ごめん、泣き虫で……」

こんな僕でも、誰かを愛せますか？

いつか、この存在意義に心からの感謝をすることが――――。

「あのさ、ラヴィの力はたくさんの人を幸せにするって…母さんを救ってくれてありがとう」

懐中にアベルを抱き締めたまま、涙を拭いもせず首を振る。
「は、恥ずかしいだろっ、男のくせに泣くなよっ」
そう願わずには、いられないから――――。
「うん――――僕の方こそ…ありがとう、アベル」

「行きなさるか」
「はい…あの、本当にごめんなさいっ、嘘付いちゃってすみませんでしたっ」
ぺこっと頭を下げて、ひたすら平謝りのラヴィに村人は苦笑い、クレイドは知らん顔を決め込む。
「ラヴィ…くん、その、顔上げて下さい」
「って言うか、正直今でも騙されたって感じがしないんだけどね」
「全然女に見えるもんな」

「つーか、胸無いだけで女？」
「男ですってばっ！！もうっ」
謝る立場で何だが、声を大にしてラヴィが言い切る。
「……それにしても」
白髭の村長が興味津々、ラヴィの頬をツンツンと突いた。
「本当にスパッと治るんですな、結構な怪我だったのに」
「はぁ、まぁ…」
「長命と言うのも、あれも嘘では？」
「ほ、ほんとです…けど」
これでもかというくらい顔を近付けて、村長が耳打ちする。
「長生きの秘訣、教えてくれんかの？」
「え、え？…秘訣って言われても、体質なので僕には教えることなんて…」
「勿体ぶらんでも」
「ぶってないですっ、ホントに僕のは生まれつきなんです」
助けて欲しそうに師匠を見るが、全然全くの無視…と言うより、見

てもいない。
帰り際だというのに酒を片手に、沼主から救ったとされる四人の娘（今度は間違いなく美人）に囲まれて、随分楽しそうである。

「ラヴィくん」

「ジェイクさん。あの、騙してすみませんでした…迷惑もかけちゃったみたいで」

「迷惑だなんて、私は心配性なだけですよ。ですがすっかり良くなって…血だらけの貴方を見た時は本当に……」

目頭を押えて、ジェイクが何度も良かったと繰り返す。

「ジ…ジェイクさん優しいっ…わぁ～んっ泣かないでくださぁいっっ」

めそめそと、泣き虫二人が抱き合って感動に浸る。

「阿呆か。馬鹿弟子っ、帰るぞっ」

「うぅ゛…それじゃあジェイクさん帰ります、皆さんもお世話になりました」

「世話になったのはこちらです、お元気で」

「また何時でも遊びに来てね」

口々に村人からの感謝と別れの言葉を聞きながら、村を後にする。

「し、師匠っ待って下さいよっ、暗くて道が」

何もこんな時間から帰らなくてもと、日が落ちて暗くなった夜道の先を行くクレイドを追う。

「だいたい…なんなんですかこの量。貰い過ぎですよ」

背に負うことはないが、報酬として戴いた酒樽を今度はリヤカーを引いて運ばされる。

緩いとはいえ上り坂。それだけでも結構キツイのに、足許が分かり辛い。

「追ってくるな。夜逃げの知り合いと思われんだろーがっ」

「だったら今夜じゃなくて、明日の朝でも良かったんじゃないですか？」

「お前のややこしい事情を汲んでやってんだ。馬鹿がっ」

「僕の、事情？」

クレイドの言葉に、ラヴィははたと思い立って一瞬立ち止まり、今度は慌ててリヤカーを引く。

「そうだった。僕、無断外泊決め込んじゃいました――――ど、どーしよ！？これってやっぱりマズイですよねっ？捜索とかされてたり…じょーだんっ、野営ってことで誤魔化せませんか？えっとえっと…師匠っとにかく早く帰らなきゃ…っ」

「パニくるな。その時は開き直って奴等を言い負かせ。誰も言い返

せねぇよ、お前には」
「そ、そうなんでしょーか？」
やっと追い付いたラヴィが、信憑性なさそうに首を傾げる。
「そうなんだよっ！面白いぐらい何も分かってねぇんだな、お前は」
「だって、師匠にも迷惑かかっちゃうじゃないですか」
「可愛い事言ってくれるのはいいが、お前一つ忘れてないか？」
「え」
「俺が金を出して買った分の酒はどーしたっ」
「…あ、村長さん家に」
「今すぐ取りに行けっ、ボケがっ」
（うわぁーんっっ）
何かすぐ戻るのってかっこ悪い、と思いつつもラヴィは来た道を走った。
「師匠のオニーっっ」
《主》
「わぁっ…！びっびくりしたぁ、ジル？」

いきなり空中から逆さまで現われたジルに固まる。

《私はまだここに居ていいんですか？》

「うん、頑張ってこっちの方で意識集中してるからね、もう少しアベルの側にいてあげなよ」

こっちが何処か分からないが、空を指してラヴィが笑った。

「――ねぇ、ジル」

両手を広げ、朧ろげに見える月を見る。

「僕もいつかね……」

いつか誰かを、思いきり愛せる――そんな自分に。

《……主、ラヴィ？》

「何でもないっ…僕急ぐからっ、アベルに宜しくねっ」

そよぐ風は、もうすぐ訪れる爽秋の足音に似て。

キミはやがて見つけるだろう。

それは、不確実でもかけがえのない、目に見えないかたちで――

や。――

――おしまいじ

――。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5016h/

銷夏の水面

2010年10月16日03時16分発行